

●六月 巣ごもりに体重計をととのへる体脂肪など体内数値化

河村郁子

同居する子が体重体組成計を買ってきた。今はこういうものになるらしい。少しのあいだ乗っている姿をみたが、そのあと放つてある。じぶんは数字が変わるところ、また時間もあるところから、よく乗っている。この歌はタイトル「令和二年のもろもろ」のうち六月のもの。巣ごもりで今の状況は一目瞭然。そのなかで、ととのへるといふ方にも用意するといった意味のほか体調を調えるといったような気分がある。数値化（可視化）は、その仕組みはともかく今の時代のもの。家内にいろいろあった九、十月を除いて一月から十二月までが、歌一首ずつでカバーされた。なかに師という岡井隆の訃報に触れたうた（七月）をふくむ。

十一月 姪つ子の薫の還暦祝ひつづわれの老化を実感すなり

老化というハッキリとした云い方にまず目が向いた。じぶんも七十代に入つて、違ってきたとおもうことがある。ここでは姪の還暦祝いに居合わせている。薫の名のよさもあるとおもう。

●画帳よりこぼるる瀬音枯野人

新野祐子

この句の「枯野人」に、見慣れない、聞きなれないところから注目した。読みは検索すると「かれのびと」で、また冬の季語だという（wedlio辞書）。「一対か一対一か枯野人」（鷹羽狩行）が引用されていた。こちらの句の人数は二人。基本的な人数でもある。

画帳はスケッチブックで作者のものか。ひらいて（みると）、そこに聞こえるもの、見えるものがある。過去の再現というようなもの（こと）。この再現こそ文芸的なものである。枯野人は一人だろうか。一方で、過去の句の上書きにもなっている。

韓流に嵌まる友より寒卵

卵（玉子の意）は狭い意味で鶏卵のことだが、寒卵となると、とくにそう。鶏卵が貴重品だった時代をせる一人だが。また、韓流ドラマ（とくに史劇）に嵌まっている一人でもある。韓流はさいしょに変換する。寒卵には何か懐かしいひびきがある。間柄の近しさ。連作タイトルは「冬の愉しみ」だが、次の、こんな句の生活感には、どこの冬だろうかという在所性もある。

鳥たちのすこし近くへ雪卸

●丸餅は庄内地方、角餅は内陸なれば雑煮もちがふ

布宮慈子

旅行者の歌ではない。いろいろ発見というか再確認がある。学生時代のことだが、(西宮に)帰省しないという下宿のクラスメートに求められ、餅を持ちかえたことがある。丸餅でなかった(角)餅に少しがっかりしたようだった。丸餅と角餅と違っていいことにもいろいろ訳や経緯のあることがある。母は何かあるとよく赤飯を炊いたが、この連作(「餅つき」)のなかでは、義母が(よく)餅を搗いてもてなしてくれた、という。いくらかは思い出のなかで、今現在ではホームベーカーリーを使って、餅を搗く(餅が搗かれる)。そこに世代間のやりとりもある。

餅の名称もそれぞれ。さなぶり餅、刈り上げ餅などはみな農事にかかわる、としている(二首目)。さなぶりの語は東北、関東で云われるようだ。

生餅はうまいとこのごろ思ふなり子どもの時は当たり前すぎて

生餅(なまもち)は、ここでは搗きたての餅のことか。「このごろ」ということは多々ある。

前号作品短評B 〈慈子〉

●蠟梅の匂いかすかな路地の奥 春は静かに近づきくるも

市川茂子

ロウバイ(蠟梅・臘梅)という名前の由来には諸説ある。半透明の黄色い花がロウ細工のようである、開花期が陰暦十二月の異名「臘月」に当たるため、という説など。ほかの花木に先駆けて香りのよい花をつけるので、早春を告げる花として知られる。(コロナと言っている)春はひっそりと確実にやってくるのだなあ、という感慨。コロナ騒ぎから一年たって、季節が巡るのをしみじみ感じている作者像が見えてくる。

命絶つ苦渋のあかしに残されし歌の一首に思い重ねる

詞書ことばがきから萩原慎一郎の経歴をたどると、非正規歌人として紹介されてはいるが、数々の受賞歴があり短歌結社にも所属していたことがわかる。親の仕事の関係で海外で暮らし、帰国してから私立名門の中高一貫校に入学。しかし、この中学・高校で受けたいじめにより後々まで精神的な後遺症に苦しみ、非正規の仕事をするも三十二歳の若さで亡くなっている。歌集『滑走路』はすでに入稿を終えていたが、没後に出された。出版されると多くの共感を呼び、歌集としては異例のベストセ

ラーとなり、映画化までされたという。こんな歌がある。「頭を下げて頭を下げて牛丼を食べて頭を下げて暮れゆく」「東京の群れのなかにて叫びたい 確かにぼくがここにいること」。

●手作りのマスクに飽きて不織布の無機質にまた委ねたる冬

大橋千佳子

いま現在をうまく切り取った歌である。一年ほど前、マスクが店頭から消えた。不織布のマスクは輸入に依存していたのだ。それなら自分で手作りしてみようと、多くの人が思ったに違いない。しかし、コロナ禍は長引き、一向に収まらない。手作りのマスクはいろいろな柄で楽しかったが、それにも飽きた。不織布のマスクがまた店に並び始めたことだし、布マスクより防護するにはいいらしい。また不織布マスクにするか、という気持ちの移り変わりを表現。「コロナ」という語を使わずに、コロナ禍の長さを浮かび上がらせた一首。

「変な奴ばかりが通うこんなところ母校じゃない」が彼のおはよう

授業中こっそり見せる免許証社会を拒みしは過去も過去

会話をそのまま生かした歌は、屈折した言葉のなかにも素直さが見て取れる。次の歌も、生徒の「甘えをやりわり受け止めているようだ。学校の現場に触れることがないので、とても新鮮。短歌はあくまで創作であるが、やはり事実に基づく重みというものを感じさせる歌群である。

●メグちゃんを庭にみしことメグちゃんのプライベートをしりし心地か

小野澤繁雄

メグちゃんは犬である。犬のプライベートは、すなわち飼い主のプライベートであろう。しかし、外で会うときは、犬にも外面があるのだという不思議な感覚、心の揺れを歌っている。

ブランチと云った分館合流点となるここにしてブランチ凍る

ブランチは branch で枝、部門や支部のこと。ここでは図書館の分館か。ブランチとされていた分館がほかと合わさって、当初の計画が凍結されたという意味だろうか。このごろでは、よくある話かもしれない。